



毎月一回一日発行  
昭和40年2月20日  
第三種郵便物認可

4-1998

# 神々に祈る独特の歴史感覚 和歌から見た昭和天皇像

田所 泉  
(中央大学講師)



なぜ和歌が

昨年末、『昭和天皇の和歌』（創樹社）という本を出しました。私なりの天皇論のつもりです。

昭和天皇は一万首もの歌を詠んだと伝えられています。それに対する批評・研究はありません。専門歌人でないこと、秀作が少ないこと、あるいは「ホントにあの人が作ってるの？」という疑問があること——などがその理由でしょう。

念のため、皇室問題に詳しいジャーナリストの高橋紘さんに確かめました。「大丈夫、ホンモノ」とのことでした。侍従や「宮内庁御用掛」の専門歌人が修整することはありますが、最後はご本人に戻して、承認してもらおうようです。

私の研究対象は和歌に限りませんでした。どんな時、

何をどう詠んだか、昭和天皇の心の姿をその中から探ることができるか、という視点です。「どうせ建前ばかりで、本音が出ていないんじゃないか」との疑問は残るでしょう。確かに、本音の歌と建前の歌がちやまぜになっています。私はその両方を昭和天皇の「意識」と見なし、歌のなかで物の見方や感じ方が思わず透けて見えるところを「下意識」として、読み込んでみました。

一九九一（平成三）年に読売新聞社から刊行された『おほつなばら』に、年代順に配列した昭和天皇の和歌八百六十五首が載っています。ほかに数首が知られていますが、これが一応決定版です。宮内庁侍従職の編集によるものですが、敗戦前の作品がたった二十五首しかありません。ほと

んどが年一回の歌会始の「御製」で、二首だけ、戦争に対して否定的な調子の歌が入っています。「をとめらの雛まつる日に戦をばとどめしいさを思ひ出でにけり」が、白川義則大将の遺族に一九三三年に贈った歌で、白川大将は前年の上海事変の派遣軍司令官です。ただし、戦時中この歌は公表されませんでした。もう一つは一九四五年三月、東京大空襲のあと、お忍びで江東区を視察した印象と思われる「戦のわざはひうけし国民をおもふこころにいでたちてきぬ」。これは地方巡幸の歌として一九四六年十月に発表されたのですが、『おほつなばら』で初めて敗戦前の作品だということが明らかにされました。

一九四五年八月、昭和天皇は数え年四十五歳でした。その年まで歌をほとんど作らなかつたとは考えにくいし、侍従の記録などにも戦時中の作歌を裏付ける記述があります。だとすれば、戦争とのかかわりで、公表してはまずい作品がかなりあるのではないかと、という推測も成り立ちます。ついでに言えば、恋の歌が一首もないのが、目立つた特徴の一つです。もう一つ、「ふるさと」を詠んだ歌も皆無です。祖父・明治天皇には、恋の歌もあり、ふるさと京都を懐かしむ歌は多い。昭和天皇はふるさとを持たず、あまねく日本全体を覆う存在であろうとした。特別の地理感覚の持ち主だったと言えましょう。

太陽と自分を同一視  
敗戦前の歌には、時局を詠んだもの、夜明けや

朝を歌ったものが目立ちます。一九二八(昭和三)年正月、「山山の色はあらたにみゆれどもわがまつりごといかにかあるらむ」という決意表明で始まった昭和の新政は、その年に中国の内戦への干渉である第二次山東出兵、張作霖爆殺、一九三一年九月の柳条湖事件と、大陸への進出に向かいました。一九三三年正月、「あめつちの神にぞ祈る朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を」が詠まれます。前年に「満州国」ができ、国際連盟から調査団が来て日本の侵略であると結論し、日本はこの年、これを拒否して国際連盟を脱退します。その環境からみるとこの歌はまるでソツポを向いています。おそろく意識的なソツポでしょう。

日露戦争開始の年に明治天皇が「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」と詠みましたが、それとよく似ています。

一九三七年に蘆溝橋事件、翌一九三八年正月には「静かなる神のみその朝ほらけ世のありさまもかかれとぞ思ふ」。神の御苑みそのとは宮中の賢所・皇靈殿・神殿です。ときは南京占領の目前、南京の人びとにとって「世のありさま」はこの歌とは正反對のものでした。なお南京事件の情報は昭和天皇に届いていなかったようです。太平洋戦争開始直後の一九四二年歌会始では「峰つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり」。これはどう見ても戦勝祈願の歌です。そして一九四五年、敗戦前の歌では初めて夜と月があらわれず。「風さむき霜夜の月に世をいのるひろまへ

きよく梅かをるなり」

ところが戦後も、朝の歌が詠まれつづけます。一九四七年歌会始「たのもしく夜はあけそめぬ水戸の町うつ槌の音も高きこえて」は、地方巡行で見た水戸の復興を歌い、同年五月、新憲法施行の際は「うれしくも国の掟のさだまりてあけゆく空のごともあるかな」とたたえました。

朝の歌の極め付きは、一九六〇年歌会始の次の作でしょう。「さしのぼる朝日の光へだてなく世を照らさむぞわがねがひなる」。ときは六〇年安保、二分した国論のただ中で、「へだてなく世を照らさむ」と願うのです。朝日と天皇の姿はここで重なり合います。これほどさりげなく、そしてへだてなく、太陽と自分を同一視できる同時代人を、私はほかに知りません。

終戦のとき、そして一九五二年四月までの占領期、昭和天皇はどういう意識ですごしていたか。

終戦時の歌はあとで触れます。一九四六年正月、「松上雪」を題にした歌会始の歌は「ふりつもるみ雪にたへて色かへぬ松ぞををしき人もかくあれ」。松の木に雪がつもっている風景は珍しくありませんが、それを「雄々し」と見て、「人もかくあれ」と命じるとなると、これは一種の勅語です。占領下の苦難を象徴する雪に耐えて、「色を変えない」ことが称賛される。「ををし」はほめ言葉で、男性優位の環境で成人した昭和天皇はこの形容詞を好んで用いました。

一九四八年正月には「春たてど山には雪のこ

るなり国のすがたも今はかくこそ」の歌があり、一九五二年、「講和条約発効の日を迎へて」の五首のうち二首目に「国の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに」とあります。占領は冬の時代、独立は国の春、この時期の昭和天皇の意識を物語っています。

地方巡行と「外つ国の旅」

昭和天皇の戦後巡行はGHQの示唆によって始まりました。一九四六年から一九五四年、北海道ゆきで一巡します。行く先々で歌が詠まれます。その後は、各地の国民体育大会と植樹祭に毎年のように出むき、歌を作りました。歌碑になって、あちこちに建っています。一つだけ行きそびれたのが沖縄です。国体に行く予定だった一九八七年、病気で倒れ、「思はざる病となりぬ沖縄をたづねて果さむつとめありしを」と詠んでいます。

昭和天皇の戦後の海外旅行は二度あります。最初は一九七一年の欧州訪問でした。イギリス、オランダで戦争に関して同じような歌があります。イギリスでの二首はこうです。「戦はててみそとせ近きになほつらむ人あるをわれはおもひかなしむ」「さはあれど多くの人はあたたかくむかへくれしをうれしと思ふ」。あとの歌は極めて散文的ですが、一部の人、多くの人と区分けして、つらむのは少数、としています。けれども、「つらむ」と見なすのは正確とは言えません。戦争責任に対して「怒る」人びとが追及する。これを少しずらして、「つらむ」と受けとるのが昭和天皇の

感性です。

その旅の最終訪問国が西ドイツでした。「戦ひて共にいたつきし人々はあつくもわれらをむかへくれける」。昭和天皇と共に戦った人びとは、戦争責任を問われ、裁かれたり追放されたりしたのです。「いたつき」が「労苦」を意味するならば、日本人やドイツ人だけでなく、他のヨーロッパあるいはアジアの人たちも「いたつき」ました。ドイツだけ「あつくもわれらをむかへくれける」というのは、少し国際感覚がずれています。

一九七五年の訪米は、欧州に比べて気楽でした。「こともなくアメリカの旅終へしこともろもろの人の力ぞと思ふ」「戦の最中も居間にほまれの高き君が像をかざりぬたりき」。これはリンカーンの胸像です。実際に飾っていたらしいです。

#### 終戦一首か終戦四首か

「人」に関する歌は、国民一般、肉親、特定の人物などいろいろありますが、一九七六年、在位五十一年の歌を一つあげます。「喜びも悲しみも皆国民と共に過ぎぬこの五十年を」。なにか映画の題名みたいですが、こう歌うことによつて、五十年間が一本の糸となつてつながり、戦前と戦後の区別がきれいに消えてしまうところに注目したいと思います。昭和天皇の独特な歴史感覚のあらわれとも言えます。

肉親の中では、明治天皇、母の貞明皇后、明仁皇太子「皇太子」は「ひのみこ」と読みます。――、浩宮を詠んだ歌が多く、良子皇后や美智子

妃の歌はわずかです。大正天皇はゼロ。総じて、皇位継承予定者に、昭和天皇のまなざしが注がれているように感じられます。

ここで、一九四五年八月に戻ります。「おほうなばら」には、「終戦時の感想」として次の二首が載っています。「海の外の陸に小島にのこる民のうへやすかれとたたいのるなり」「爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさどめけり身はいかならむとも」。実はこのほかに二首あるのです。一九四五年十月から翌年五月まで侍従次長を務めた木下道雄氏が、一九六八年に『宮中見聞録』という本を出し、その中でこの二首のほか「身はいかになるともいくさどめけりただたふれゆく民をおもひて」「国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさどめけり」を記載しています。

「国がらを」は「国体護持」そのものです。一九九〇年に刊行された木下氏の当時の日記『側近日誌』には、昭和天皇に「拜謁」して「御製を宣伝的にならぬ方法にて世上に洩らすこと、御許しを得たり」とあり、四首が記されています。

これについて、徳川義寛・元侍従長の『侍従長の遺言』(一九九七年)に「木下さんの日記も困ったもので、陛下の歌を草稿のまま写しておられる」とあり、真作だったことを裏書きしています。倒れゆく民への思いと、国柄を守るためイバラの道を進もうという決意とは、本来まったく違う事なのですが、昭和天皇の意識の中では共存しているように見えます。

「人間宣言」だったか？

「祈る」という動詞が非常に多いのも、昭和天皇の和歌の特色の一つです。祈りをささげる神は、神道の、そして皇祖の神です。昭和天皇は宮中の祭事を勤勉に務めました。「わが庭の宮居に祭る神々に世のたひらぎを祈る朝々」。一九七五年正月の歌です。昭和天皇は終生、現役の天皇でしたが、それは祭事によつて神々と共に存在していることをことのほか重要と思つたためにほかなりません。

一九四六年正月の詔書、いわゆる「人間宣言」は、では何だったのでしょうか。一九七七年の記者会見で、「明治天皇の五箇条御誓文を入れるのが一番の目的で、神格とかは二の問題であつた」と昭和天皇は語っています。御誓文を発し「民主主義を採用したのは明治大帝の思召しである。しかも神々に誓われた」。さらに、民主主義は決して輸入のものではないことを示す必要があつた。明治憲法は民主主義の憲法、と説明が加わります。

昭和天皇は、一度たりとも神の存在を否定したことはなく、敬虔に神を祭り、神々に祈り続けた存在でした。昭和天皇はもともと人間でしたが、しかし、戦後も、特別な人間であり続けたのです。一貫して君主としての心構えを失うことなかった、日本でただ一人の人でした。

(本稿は二月二十四日、同盟クラブでの講演会から一部を要約、加筆)

## 好況支える堅実な市民

### NYで見た米国活力の断面

鈴木邦彦

(共同通信社前ニューヨーク総局長)

米国の景気拡大は、この四月で八年目を迎え、インフレなき成長をおう歌しているように見える。不倫もみ消し疑惑で一時は辞任説までささやかれたクリントン大統領が世論の高支持をとりつけ、巻き返した背景にも絶対的な経済の追い風がある。だが、繁栄の底には深いヘドロがたい積している。「米国の世紀」と呼ばれた二十世紀。その幕引き前の二年半をニューヨークで暮らした体験をもとに米国の活力の断面を紹介したい。

ニューヨークのメトロポリタン美術館は、パリのルーブル美術館と並ぶ美術品の宝庫である。米新聞大会がニューヨークで開かれた一夜、地元のホスト役ニューヨーク・タイムズ紙の主催でメトロポリタン美術館を借り切ってレセプションが行われたことがある。米国、エジプト、中国の三室が会場で、それぞれの国の料理を食べながら、民族音楽の演奏を楽しむ趣向だ。世界的な彫刻、絵画と目と鼻の先でグラス片手に数百人が談笑している。談論風発してだれかがグラスを投げつけ美術品に傷がつくのではないかと心配になった。「さすがに全米一の新聞の趣向」と、顔見知りのニューヨーク・タイムズ国際広告部長氏に声を

かけた。「美術館も資金難だからね」と、明かしてくれたレセプション開催費用が意外に安かったのを覚えている。同氏は「演奏家も料理人も美術館の指定だから、彼等は手数料も稼いでいるはずだ」とつけ加えた。米国の大学には博物館経営学の講座まである。世界に冠たるメトロポリタン美術館も採算維持のために綱渡りのような努力を重ねていると知った。

#### 背景に巧妙な金融政策

「失業は過去二十四年間で、インフレもこの三十年で最低となった。所得は上昇中で持ち家の数も過去最高だ。犯罪も五年連続で減った」。クリントン大統領は今年一月末の一般教書演説でこう実績を誇示した。数字に偽りはないが実績を独り占めにしてはクレームがつくのではないが。今回の長期景気拡大の背景には一九八〇年代初期からの規制緩和による自由競争の活性化、成熟・軍需産業を中心にしたリストラがある。特に在任十年にわたるグリーンズパン連邦準備制度理事会(FRB)議長の金融政策の好かじ取りなしには、こうはいかなかったに違いない。ワシントン・タ

ムズ紙は二月末「グリーンズパン景気」と題する社説で、そのかじ取りの妙をたたえた。

ところでニューヨークで一昨年ベストテン入りした「THE MILLIONAIRE NEXT DOOR」(隣の百万長者)という一冊を読んで触発された。経済学者二人が十年にわたり百万長者を調査し、まとめた本である。米国の金持ちという今世紀最大の成功物語の主役ビル・ゲイツ氏やCNNテレビの創始者テッド・ターナー氏が思い浮かぶ。この本が対象としているのはこうした億万長者ではなく、資産百万―千万ドル(約一億二千万円―十二億円)の百万長者である。

典型的な例として挙げられている百万長者とその家族の横顔およびその生活ぶりを見ると――。  
年齢五十七歳、子供三人 一代で築いた自営業(半数が共稼ぎ、妻の職業は先生が多い) 持ち家の資産価値は三十二万ドル(約三千八百万円) 外車は持たず、服装や装身具に力ネをかけない(妻も浪費しない) 家計費を熟知 収入の一五%程度を株式投資などの運用に回す 教育歴は高く、子供の教育にも熱心 離婚歴なし 遺産を子供に残す場合、息子より娘に手厚くと考えている――などである。

米国の土地や家屋は日本に比べ割安だから日米比較はむずかしいが、いずれにしても米国の好況を陰で支えているのは、こうした堅実な小市民とその家族とも言えるのではないか。ちなみに著者の二人は研究熱心なあまり百万長者の生活様式を

まねし、その結果めでたく長者の仲間入りした。

### 「差別」には異常に敏感

赴任して間もなく自宅アパート近くの安売り電器屋へテレビを買いに行った。支払いの段になって売子の子の女性が電器屋の「会員になれ」と勧める。会員になれば割引があるのだという。どうせ新会員を獲得すれば売子の子の点数になるのだと直感したが、かわいい笑顔につられて「いいよ」と承諾した。クレジットカードの資格審査の間、しばらく待たされた。ところが売子の子が戻って来ると、申し訳なさそうにカードが発行されてからまだ日が浅く、審査のしようがないから会員にならないと言う。

驚いたのは数日後のことである。カード審査にあたった会社から自宅に手紙が届き、なぜカード審査に通らなかったか理由が書いてある。しかも「もしあなたがこれを差別だと感じたなら」として、「丁寧」に訴える先の電話番号と住所が付記されているのだ。もともとさして欲しいと思わなかった会員券だから気にもとめていなかったのだが、「差別」に異常に敏感な米国社会の内幕を垣間見る思いがした。

米企業では原則として定年制はない。よく仕事ができ、まだやる気のある六十歳をそれだけでやめさせるのは「老人差別」だからである。その代わり仕事の出来が悪ければ、明日からでもクビにできる。差別に過敏なのは逆に依然としてさま

ざまな差別が存在しているあかしであろう。法曹関係者によると米国の民事訴訟の過半は、セクハラをはじめ広い意味での女性差別問題だといわれる。女性の社会進出が進んでいるとはいえ、男性に比べまだまだ女性の地位や権利の保障が軽視されているのが分かる。

米国は訴訟社会と言われる。日本に比べ訴訟手続が簡単なこと、陪審員制度によつて普通の市民にとつても司法制度が身近なことなども関係しているように思われる。納税者の訴訟も少ないのは、サラリーマンも自分で税務署への申告が義務づけられているのと無関係ではない。個人主義に根ざす自己主張はきわめて強い。

### 覚めた契約社会

ドナルド・トランプ氏といえば不動産王としてわが国でも知られている。マンハッタンの五番街にある金色のトランプタワーで開かれた誕生パーティーをのぞいたことがある。盛装のスーツ選手や芸能人を前にトランプ氏の四人の子供たちが、一人ずつマイク片手にお祝いの言葉を贈る。華麗な人生を過ごしてきたトランプ氏のことである。子供たちの母親はそれぞれ違うのだと、たま

たま隣り合わせたニューヨーク・タイムズ紙の社交欄担当記者が解説してくれた。四歳になったばかりの末娘まで片言ながら大きな声で堂々たるお祝いの言葉を話したのは、驚きを超えて感動に近い感慨を覚えた。米国では小学校から、デイベ

ーティング(論争)の授業があるのは知ってはいしたが、家庭でも幼児から一人前扱いなのである。こうした子供が大人になるとどうなるか。ある

日本企業の友人から聞いた話を紹介しよう。この企業では在米法人の業績が一向に上がらないのに業を煮やし、日本人社長を呼び戻し、トップを米国の会社から彼の女性秘書ともどもリクルートした。ところが、しばらくして米人新社長が使い込みをしていることが分かった。告発したのは、彼の腹心の部下だったはずの女性秘書である。この企業では新社長を直ちにクビにしたが、彼はしばらくして姿をみせ、再就職のための推薦状を書いてくれと所望した。

友人によると、初めは米人社長と秘書の間にかトラブルがあったのではないかと考えたという。しかし「よく聞いてみると、秘書の告発も前社長の依頼も米国では普通のことだと言うのです。推薦状の書き方には苦労しました」と、この友人は話す。契約社会の米国では、経営者と従業員の関係はきわめて覚めており、日本の労使慣行とは雲泥の開きがある。

### ボランティアは生きがい

日本メディア仲間で、いつからかニューヨーク「卒業」の三条件が言い伝えられている。一つはカーネギーホールで歌うこと。二つは仲間のゴルフコンペで優勝すること。三つはニューヨーク・マラソンを完走すること——である。大半

は仕事に追われ条件を満たさないうちに任期切れとなるのだが、なかには一年余で達成する文武両道の達人もいる。たまたま達人の一人から極意を伝授されたのがきっかけで、初体験のマラソンを完走する巡り合わせになった。二万五千人余のマラソン参加者の面倒をみてるのはボランティアと沿道の市民である。ランナーと沿道が一体となる壮大な祭りの楽しさを心ゆくまで堪能した。

米国には五万を超えるボランティア団体があるといわれる。ホームレスの援護や海外援助など、その活動分野はあらゆる領域に及び、やや古いが、一九八九年に週平均四時間のボランティア活動に従事した十八歳以上の米国人は、九千八百万人(同年年齢層人口の五四%)に上ったという。

米国のボランティア活動の原点は、西部開拓者にあるといわれる。未開の地にあつては政府の援助は望むべくもなく、開拓者はすべての問題に自力で立ち向かわなくてはならなかったからだ。一九六〇年代に当時のケネディ大統領が提唱した海外協力隊は今でも続いており、参加者たちが各地のボランティア活動の柱になっている例も多い。

学生の就職試験の際には、ボランティア活動に参加した経験があるかどうかが問われる。企業が実社会での自発的な活動体験を評価しているからである。興味深いのは人生の「生きがい」を問う生活意識調査では、必ずボランティア活動が最上位か上位を占めることである。「小さな政府」が伝統の米社会では、なにもしない政府に代わって

草の根のボランティア活動が底辺を支えている。毎年行われるボランティア団体の全国大会にはいつも歴代大統領夫妻がジーパン姿で出席し、市民と一緒に奉仕活動のデモンストレーションをするのは皮肉な光景でもある。

#### 偉大な大統領も好況が前提

クリントン氏が大統領に初当選した当時、米国では大統領夫妻の会話をネタにした冗談が受けられた。クリントン氏が「おれと結婚してよかったら。お前もファーストレディーになれたのだから」と夫人に語りかけたのに対し、ヒラリー夫人は「なに言ってるのよ。わたしと結婚すればだれでも大統領にしてみせるわ」と答えたというのである。不倫も消し疑惑が明るみに出た後、ヒラリー夫人は素早くテレビに出演して弁舌さわやかに夫を弁護した。世論調査で大統領支持率が過去最高の水準に跳ね上がった陰には、好調な経済も

さることながら、「ヒラリーが気にしないなら、われわれも気にしない」という国民感情があつたといわれる。ともあれニューヨークでは今、「女房に頭が上がらない亭主」を材料にしたギャグがもてはやされているとか。

戦後三番目の長さになる今回の景気拡大は、学者やエコノミストの間でも「新バラダイム論」や「ニューエコノミー論」と呼ばれる理論を生み、人気を博しつつある。一口で言えば、米経済はリストラと情報技術革命によって体質が変わり、生

産性が飛躍的に増大したことで過去の景気成熟期にみられた過熱・後退といった循環パターンが弱まった、との主張である。グリーンSPAN FRB議長ですらこの見解には否定的だから、まだ市民権を得たとは言えない。一方でマサチューセッツ工科大学(MIT)のレスター・サロー教授によれば、米国の貧富の格差はますます拡大しており、屋台骨を揺るがしかねないところまできている。同じMITのポール・クルーグマン教授は、経済好調の根底に失業を恐れる「労働者の恐怖感」があり、コストプッシュ・インフレがなくなつたのが要因だとして、近い将来「労働者の反乱」を示唆している。

クリントン大統領の活力は「歴史に残る偉大な大統領」になりたいとの野望である。先の一般教書演説でも教育と、医療、社会保障という米社会の長年の課題に正面から取り組む姿勢を打ち出した。日本でもナイフを使った教師の刺殺事件が問題になっているが、けん銃と麻薬が容易に入手できる米国の事態は深刻である。人間の尊厳や権利の基礎となる教育や医療制度が日欧に比べ著しく立ち遅れて、ヘド口のようにたい積しているのはまぎれもない。米国では二期目の大統領はレームダックと呼ばれ、二期目で業績を残した大統領はほとんどいない。クリントン大統領が野望を果たせるかどうか。前提となるのは現在の好況がいつまで続くかだ。異常とも言える株高の行方とともに目が離せないところだ。

## 金融情報部門を売却

赤字転落ダウ・ジョーンズ

米新聞・情報サービスの大手で、ウォールストリート・ジャーナルなどを発行するダウ・ジョーンズ社がついに赤字に転落した。一九九七年の決算は、金融情報サービス部門の不振に伴うリストラなどのため、約八億二百三十万ドル(約千八百億円)の赤字となった。前年は一億八千九百九十七万ドルの黒字だった。赤字になったのは一九六三年の株式公開以来初めてのことである。

経済誌「フォーチュン」が毎年発表する米国内で最も称賛されている企業のリストでも、新聞・出版・印刷部門で連続三年トップだったダウ・ジョーンズは、今年は八位に転落した。これも経営に問題ありとフォーチュン誌が判断した結果である。旗艦紙である経済専門誌、ウォールストリート・ジャーナルが折からの好景気で広告が好調のため、屋台骨が揺らぐことにはならないが、同紙もかつては発行部数が二百万を超えていたのに最近は百七十七万部まで落ち込んでおり、長期減少傾向にある。

このため同紙は三月二十日の金曜日に紙面のリニューアルを断行した。同紙は毎日三セクションの構成になっているが、増ページして週末の金曜

日にだけ第四セクションを設け、カラー化することになった。狙いはカラーを望む広告主の要望にこたえることにある。しかし第四セクションは、レジャーあり、スポーツあり、芸能あり、健康ありの生活情報満載の一般紙同様の内容で、経済専門のイメージを脱却して、部数減少に歯止めをかけようという戦略を反映したものである。

経営の足を引っ張っているのは、金融情報サービスの「DJマーケット」。昨年三月にこのコラムでも、ダウ・ジョーンズの株価低迷にオーナー一族の一部が反発している模様を書いたが、そのオーナーたちが、しびれを切らして今すぐ結果を出せと、経営陣に迫るほど、事態はこじれていた。結局三月十七日になってダウ・ジョーンズ社は、マーケットを金融情報サービスの大手、ブリッジ・インフォメーション・システムズに総額五億一千万ドル(約六百五十億円)で売却すると発表した。

フォーチュンの最近号によると、ブリッジのほかに証券会社のキャンター・フィッツジェラルド、カナダの新聞チェーンのトムソン・フィナンシャル・サービス、米情報サービスのプライマークの三社が関心を示していた。かつて売却に関心を示していたと言われる情報サービスのトップで、DJマーケットの最大のライバルである英国のロイターと、米国のブルームバーグは断念した。

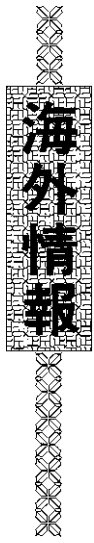
もともとDJマーケットはDJ社が独自に開発したものではなく、金融情報部門でロイターに後

れを取っていたために、手取り早くテレレイトという金融情報サービスを買収したのである。しかしロイターには水を開けられ、後発のブルームバーグには追い上げられるで、経営を圧迫している。専門家によればDJマーケットの技術はロイターやブルームバーグのそれに比べると、「石器時代」の代物だという。また情報の質でも立ち遅れている。

売却説がくすぶる中で、ダウ・ジョーンズ社の最高経営責任者、ピーター・カーン氏は三年間に六億五千万ドルを投入して、DJマーケットに投入すると発表していた。しかし資金の豊富なロイターは既に一九九〇年代の初めに、システムの性能向上に十億ドル以上も投入しているのだ。ブルームバーグも同じだ。そこで先に経営陣を批判したオーナー一族の中で最も強硬なエリザベス・ゴスさんと、ウィリアム・C・コックス氏が経営陣の総退陣を主張している。

DJマーケットの売却価格について、ダウ・ジョーンズ側は一時七億ないし八億ドルで売れると踏んでいた。しかし今となっては、よくて三億五千万ドルと市場では言われていたので、まずまずの結果だ。同社が金融情報サービスの分野に遅れて参入したことで株主の資産十億ドル以上が「どぶに流された」とコックス氏は怒っている。

(佐々木謙一＝同盟クラブ会員)



## メディア談話室

## ノンフィクションに学ぶ

権田 萬治

顔写真は役立たない

私は最近、アメリカの犯罪ノンフィクションを読んでる。きつかけは、一つにはカリフォルニア州立大学のエリック・W・ヒッキーの『連続殺人犯とその被害者』（未訳、一九九一年）という犯罪学の研究書の序文に、異常犯罪ものミステリーの傑作とされるトマス・ハリスの『羊たちの沈黙』などよりも、犯罪ノンフィクションの方がはるかに恐ろしいと書いてあったことである。

『羊たちの沈黙』は映画化され、アカデミー賞を受賞した。映画のお好きな方はご存じだろう。

そんなわけで、ヒッキーが取り上げていたアン・ルールの『傍らの見知らぬ人』（未訳、一九八〇年、八九九年、改訂増補）を取り寄せて読んでみた。少なくとも三十五人の若い女性を殺したとされる、アメリカ犯罪史上有名なテッド・バンディを扱った作品である。このノンフィクション作家はもともと婦人警官だったが、一時期、この恐ろしいテッドと机を並べて、「命の電話」でボランティアとして働いたことがあるという珍しい体験の持ち主。連続殺人犯の研究者として、FBIでもセミナーの講師に招かれるほどの人である。な

かなか面白い内容だが、収録されている写真を見ると、この凶悪な連続殺人犯テッドはなかなかのハンサム、しかも知的で魅力的に見える。

直木賞作家の林真理子は、神戸事件の少年の顔が見たいと語り、少年の写真に掲載した新潮社のフォーカスの編集長は、写真が少年Aを理解する手掛かりになると考えて掲載したといっていたと思う。しかし、連続殺人犯の場合、顔などは普通の人と変わらないので、顔写真がその人を理解することに役立つことはほとんどないというのが、専門家の定説になっているようだ。

例えば、イリノイ大学スプリングフィールド校のステイヴン・A・エガー教授は、『われわれの間に潜む殺人者たち 連続殺人犯とその捜査に関する考察』（未訳、一九九八年）の中で、連続殺人犯に関する神話として六つ挙げているが、その二番目に「連続殺人犯は、容姿や態度が普通の人と異なる、地獄から来た突然変異体である」とする偏見を挙げている。

こういう点を配慮すると、フォーカスの少年Aの顔写真の掲載がどれだけ意味があったのか。少年法六一条に違反するのはもちろんだが、そのほ

かの点でもいささか疑問が残る。

過熱報道と陪審裁判

私がアメリカの犯罪ノンフィクションを読むようになったもう一つのきつかけは、センセーショナルリズムによる過熱した犯罪報道が陪審裁判にどんな影響をもたらしたかという点についての関心だった。

この問題については、ピーター・ケーンの『殺人、裁判、そしてプレス』（未訳、一九九二年改訂増補版）という本があつて、ニューヨーク州のロチェスターで十一人の売春婦を殺したとされるアーサー・J・シヨークロスの報道では、さまざまな行き過ぎがあつたことが指摘されている。

ただ、事件の詳細が不明だったので、ジャック・オルセンのシヨークロスに関する重厚なノンフィクション『不出来な息子』（未訳、一九九三年）を読むことにしたのである。これも実に面白い。

ご承知のように、陪審裁判では、日本のような専門裁判官による判断でなく、一般市民の陪審による評決で有罪か無罪かが決められるため、裁判前に有罪の予断を与える材料を報道しないことが求められる。が、シヨークロス事件では、前科など被告の私生活、精神鑑定の内容、自白の内容などが事細かに報じられたとケーンは述べている。

もっとも、この事件は、二人の子供を殺した罪で服役していたシヨークロスが十四年後に仮釈放されてから起こした連続殺人で、捕まった当初か



ら、なぜこのような危険な人物を釈放したのかという問題が批判的になっていたのである。

精神病質者に近い？

ところで、これらアメリカの連続殺人犯などの事例との関連で、神戸の児童殺傷事件の少年Aの犯罪はどう考えるべきだろうか。

少年Aは、神戸新聞社に送りつけた犯行声明で、「透明な存在であるボクを造り出した義務教育と、義務教育を生み出した社会への復讐も忘れてはいない」と述べている。

このことから、宮台真司は、『透明な存在の不透明な悪意』という著書の中で、少年Aがいわば現在日本の多くの少年が置かれている学校や家庭、社会の問題を鋭く告発しているという視点を打ち出している。確かに、少年Aの犯行声明の中の言葉には、そう受け取れる部分もある。しかし、「少年を医療少年院に送致する」と決定した神戸家裁の決定要旨によれば、精神鑑定の内容は、「未分化の性衝動と攻撃性との結合により持続的かつ強固なサディズムがかねて成立しており、本件非行の重要な要因となった」「離人症状、解離傾性が存在する」「直観像素質者であつて、この顕著な特性は本件非行に寄与した一因子を構成している」云々となっている。

人格障害については明確な鑑定結果がないが、アメリカの連続殺人犯にいわれる精神病質者に近いように思われる。レットル張りは危険だし、素人診断だから、むしろ専門家の判断をお聞きした

いが、「自己中心的で傲慢、良心の呵責や罪悪感の欠如、共感能力の欠如」などのサイコパスの特徴が決定要旨からもうかがえるように思う。

「幼いころ動物に残忍性を発揮するのにも、ふつう情緒的および行動的問題の深刻な兆候だと考えられている。たとえばミルウォーキーの連続殺人犯ジェフリー・ダーマーは、気味悪いことに没頭して級友や近所の人たちを驚かせていた。犬の生首を棒に刺したり、カエルや猫を木の幹に串刺しにしたり、動物の頭蓋骨を収集したりしていた」(ロバート・D・ヘア「診断名サイコパス」・講談社)。少年Aが猫などを切り刻んでいた点もサイコパスの一つの特徴として符合すると思う。

最近、ナイフを使った中学生の凶悪犯罪が多発し、それとともに、少年法の改正問題がより声高に論じられ始めているように思われる。

だが、少年Aの事件と、例えば黒磯市の女性教師殺害事件とでは、事件の性格は大きく異なる。後者の犯行動機の説明は比較的容易だが、少年Aの場合は、きわめて難しい。高山文彦の長編ノンフィクション『地獄の季節』も力作だが、事件直後の作品だけに動機の説明は十分ではない。

犯罪動機解明こそ課題

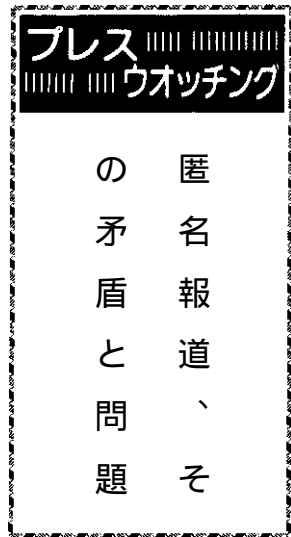
実際、アメリカの連続殺人犯の研究家の最大の課題は、どうしてこういふ恐ろしい犯罪を起こしたのかという動機の解明であり、どのようにして更生させることができるかということ、凶悪だから死刑にしてしまえというような単純な厳罰主

義の人はいない。死刑反対論者のほうがむしろ多いのである。

この点、日本の少年法改正論議が、ともすれば、フォーカスや新潮45の姿勢に象徴されるようなメディアによる断罪や、厳罰主義に傾斜しがちな点はまことに残念である。

文藝春秋の少年Aの検事調書掲載問題は、さまざまな波紋を投げかけたが、三月五日の毎日朝刊の「分かれた各社の対応」、三月十二日の朝日の「少年報道 あるべき姿は」などの特集や、柳田邦男らに語らせた文藝春秋四月号の「少年A検事調書の衝撃」という特集などによって問題点は一応出尽くした感がある。

残念なのは、検事調書が巨大メディアのいくつかにばらまかれていたことが文藝春秋が調書を掲載するまで伏せられていたことである。週刊新潮三月十二日号の「神戸『少年』供述書をマスコミにばら撒いた『犯人』という記事によると、情報を提供したのは過激派の革マル派で、文藝春秋はその作戦に踊らされたという見方になっている。が、当然のことながら革マル派は否定しており、文藝春秋もニースソースの秘匿ということと沈黙を守っている。何とも後味の悪い幕切れだが、一つ明らかになったことは、少年法の原則的な立場からの断罪では、何も問題は解決しないということである。朝日は犯罪被害者の連載企画を始めたし、NHKも少年法廷を特集した。これからの論議の深まりに期待したい。(専修大学教授)



## 匿名報道、その矛盾と問題

### 少年のアイデンティティ

匿名報道が抱える問題は、ニュース当事者が少年と一般(成人)で、大きく違ってくる。

少年事件については、最近の凶悪化、衝動性、そして急激な増加が社会に危機感を募らせている。アイデンティティや審判を非公開とした少年法の規定を無視するメディアも現れた。

同法は施行(一九四九年一月一日)から半世紀もたち、時代に合わない面が見えるのは否定できない。しかし、次の二条が理念的に誤っていると  
は思わない。

「少年の育成を期し、非行のある少年に対して性格の矯正及び環境の調整に関する保護処分を行う……」(第一条「目的」)

「家庭裁判所の審判に付された少年又は少年のときに犯した罪により公訴を提起された者については、氏名、年齢、職業、住居、容ぼう等によりその者が当該事件の本人であることを推知することができるよう記事又は写真を新聞紙その他の出版物に掲載してはならない」(第六十一条「記事

等の掲載の禁止)

神戸事件の検察調書の一部を掲載した「文藝春秋」三、四月号は、社会の関心にこたえ、事実を踏み込む報道は必要だという立場をとった。この問題は、前号で権田萬治氏が詳述している。

「新潮45」三月号は、堺市通り魔事件の被疑少年(一九)の氏名と写真を載せた。理由は、石井昂編集長によれば「少年の名前を匿名にすることで事件の本質が隠されてしまう……」(二月十八日、各紙)からなのだが、説得力は弱い。

### メーデー事件の匿名報道

そうした雑誌とは別に、新聞が実名、匿名の選択に悩むのは、一般に成人事件の場合に多い。

私自身、特に忘れられないのは「メーデー事件」(一九五二年五月一日)の裁判だった。東京地裁の一審判決(一九七〇年一月二十八日)まで十八年かかった。被告は二百数十人になり、すでに十六人が死亡、さらに過半数が無罪だった。判決の日、被告四十数人はサングラスで顔を隠した。司法記者たちは、被告側の希望を聞いて、大半を匿名で報道した。

ニュース報道の原則は「実名報道」と「匿名報道」のどちらに置くべきだろうか。十数年前、報道と人権に関する社内基準をまとめたとき、私は「匿名報道」を原則にしようとした。結局、社内討議の末、次のような表現になった。

「新聞の使命が真実の報道にあり、読者の知る権利にこたえて十全の情報を提供することに存す

るのは言うまでもありません。記事中の人名を伏せることなど本来はあってはならないことであり、仮名が理由もなく用いられている記事はいわば欠陥商品です。反面、新聞には人権尊重の義務があり……実名の報道より仮名の方が適切である場合があることも事実で……」(一九八二年、読売新聞刊「書かれる立場・書く立場」のはしがき) 消されたニュース当事者

原則がどちらであれ、プライバシーの保護には細心でなければならぬ。しかし、国民の知る権利にこたえるジャーナリストとして、記者は匿名報道に対しても気後れや痛みを感じていいはずだ。最近はそのでもないのだろうか。

二月二十六日未明、国立市のホテルで、自動車部品を扱っている会社の社長三人が自殺した事件の報道で考えてみたい。

毎日、読売、産経、東京(二十六日夕刊)は、三人の氏名、会社名、住所、ホテル名と所在地など、事件関連のデータを明記した。

その一人、小林正明さん(五一)は「1990年5月の第57回日本ダービーで優勝した『アイネスフウジン』号の馬主として知られていた」ことも伝えた(毎日、二十七日朝刊)。

一方、日経は氏名と社名を抑え、年齢と住所の町名、丁目を記載した。ホテル名は明示した。

朝日のデータは年齢と市・区名だけ。しかし、矛盾が少なくない。ホテル名は伏せたものの、その所在市町名と外観の写真を載せている。また翌

朝の続報は「一九八七年、小売会社社長は競争馬のオーナーになり、九〇年には日本ダービーを制した」(二十七日朝刊)と触れている。

日経と朝日は、故人や関係者のプライバシーを優先させるべき私的事件と見たのだろうか。また、匿名にすれば、個人のアイデンティティと人格は守られると考えたのだろうか。しかし、実際には、周辺の人々や関係者にはだれか容易に分かる。なによりも、一九九〇年のダービー制覇馬主は一人しかいないし、しかもそれはプライバシー秘匿とはどう結びつくのだろうか。

「アイデンティティの秘匿」「プライバシーの保護」という日経や朝日の意図は、この報道に関しては、首尾一貫しなかったようだ。

匿名ばかりのトップ記事

わが国は、ある意味で「匿名社会」といってよい。アイデンティティはニュース報道に不可欠ではなく、メディアの信頼性とも関係がない。

匿名報道には「断り」が必要とされず、非難や攻撃も飛んでこない。匿名の対象は、被疑者、被害者、事件関係者など、ニュースの当事者に限らない。記者名(バイライン)から情報源(ニユースソース)、データの出所(アトリビューション)まで、すべてが匿名でも記事になる。

金融不祥事は、三月に入って大蔵省や日銀など本丸に迫った。報道対象が公権力の中枢に接近するに従って、匿名報道はますます増えてくる。

三月十日の朝日朝刊の一面トップ記事は、そう

した典型だった。見出しには、以下の通り固有名称がない。記事本文もオール伏せ字だった。

銀行局幹部 高額の接待  
住専処理の調整役

関係者明かす 複数行が幅広く  
都銀関係者「下心ある」「額はトップ」

疑惑に関係する個人、団体、そして情報源などすべてが匿名で、しかも無署名記事だから、厳密に言えば、この記事に対する説明責任(アカウンタビリティ)の所在はゼロに等しい。

核心の当事者については、慣例通り、次のように経歴をもとにアイデンティティを特定しておきながら、しかし名指しは避けている。

「この幹部は、主計局長として九六年度政府予算案の編成作業に携わった後、九六年二月に銀行局兼務になった。……大蔵省の中枢ポストを歩み、『将来の事務次官候補』と目されている」

この記事は、「読者の知る権利にこたえて十全の情報を提供」しているだろうか。しかも、こうしたあいまいな記述でも、個人は特定されるから、潜在的なプライバシー侵害や名誉棄損の法的責任からは免責されない。

実名報道の理論的根拠は?

「現代用語の基礎知識」(一九九八年版)の、ジャーナリスト用語の解説(浅野健一、村上義雄)は「日本の新聞・放送は未成年者と精神医療ユーザーを除き、逮捕・強制捜査という当局のアクションを実名の根拠とする『実名報道主義』をとつ

ている。実名報道の理論的根拠は、ほとんど明確にされていない」と述べている。

そうだろうか。民主主義社会では、情報公開制が確立され、人々の「知る権利」が尊重されていないければならない。国民に必要な情報が提供され、そうした情報には、当然個人や団体のアイデンティティも含まれる。人権やプライバシーはそのうえで尊重される——と私は考える。

日米、報道姿勢の格差

先月紹介したワシントン・ポスト紙のオンブズマン、ジェネバ・オーバーホルサーは、その後も執ように情報源の匿名を批判している。

「有志ジャーナリスト委員会の調査によると、ワシントン・ポスト紙は、ルウインスキー報道で最も熱心に匿名情報源を使った。報道当初、ニユースソースが明らかにされたのは、わずか一六%だった(ロサンゼルス・タイムズ紙は四六%、ニューヨーク・タイムズ紙は五三%)」

「記者は、こつしたやり方に魅惑されやすい。しかし、続けていけばそのつけは回ってくる。それに記者が気づいたとき、変化がある」(コラム「オンブズマン」三月一日)。

匿名嫌いの彼女の筆鋒が、もっぱら「ニユースソース」に向けられるのは、「記者」や「ニユース当事者」については、アメリカで匿名は極めてまれだからだ。しかし、わが国では、それらすべてが匿名という記事を、読者はしばしば読まされている。

(前沢 猛「東京経済大学講師」)

## 放送時評

### 五輪結果に満足のTV界 Vチップ導入問題が直撃

五輪でBS普及加速

二月七日から二十二日まで、十六日間の長野冬季五輪。テレビ界にとつては上々の結果で終わつたと総括できる。

何よりも日本選手の活躍が大会を盛り上げ、そのまま家庭のテレビに熱気が伝わって視聴率は局側を満足させるものになった。ビデオリサーチ関東地区の数字だが、トップの開会式(NHK)は三五・八%で冬季大会で過去最高。二位の開会式(日本テレビ)も三〇・八%。二〇%を超えたものは九本を数える。

三億七千五百万ドルを投じて米国での放送権を独占したCBSテレビは平均視聴率一六・二%。九四年リレハンメル大会で三〇%近かつたの比べて大きく後退した。男子アイスホッケーで米国チームが早々に敗れるなど総じて米国勢不振だったのが原因とされる。CBSはスポンサーに二〇%程度を保証していたが果たせず、無料広告枠の提供に追い込まれた。

日本側が支払ったのは、NHK・民放の共同制

作組織IBCへの費用を含めNHKは三十三億五千万円、民放は十四億七千万円を投じた。そしてNHKは存分に面目をほどこし、民放は九十一億円を売り上げた。民放の場合、目標はアトラクタ五輪の七十二億円だったが、冬季大会ながら軽くこれを上回ってエビス顔である。

ビデオリサーチによると、長野五輪番組の視聴時間はリレハンメル大会の倍以上、一世帯一日平均一時間三十四分となっており、期間中一世帯当たりの一日平均全視聴時間は八時間四十五分。昨年同時期より三十四分増えている。

注目されているのはNHK・BS。「ぜんぶやる」のコピーで全種目三百時間を通したが、NHKがビデオリサーチに委託して調査している「接触率」の強さ。関東地区二百世帯のうち「五分以上見た世帯の割合」を記入式で行うものだが、女子モーグル決勝の三八・五%以下高い数字がずらり。すでに千百万世帯を超え、この冬季五輪でさらに普及が加速したBSテレビに対し、「もつ無視できない。民放との「すみ分け」を考える時期」という声が民放側から上がっている。

少年の凶悪犯罪がきっかけ  
五輪の興奮が通り過ぎたテレビ界を待ち受けるのは、とにかく難題、難局面。どうにもならない深刻な景気低迷はCM出稿に影を落とし始め、デジタル化への流れは多額の出費と経営不安をNHK、民放それぞれに強いる。そして、「ポケモン騒動」を抱えて越年したテレビ界を、こんどは

「Vチップ制」導入という問題が直撃した。

きっかけは、少年による凶悪な殺人事件の頻発である。それも年齢がどんどん下がって中学一、二年生、少年法による刑事処分の対象の下限である十六歳を下回って十四、五歳の子供の犯行。

昨年一年間の発生件数は前年を三割も上回ったそうだが、今年に入ってからさらに増勢一途。警察庁少年課の調べだと、一、二月に全国で発生した「刃物を使った少年の事件」は少なくとも三十八件。「中学生が校内で先生や同級生を刺すなど、低年齢化・凶悪化がさらに進んでいる」という。刃物以外にも殴る、蹴るの暴行によって相手を死に至らしめる事件など、連日のように新聞をにぎわせる。

重大な社会問題であり、もちろん放置できるものではないが、スクヤンダル報道に頭を抱える国会や行政府にとつて、倫理問題、青少年保護育成問題は格好な「世論かわし」にもなる。マスコミに、とくにテレビに非難を集中する発言が相次いで。

自見庄三郎郵政相(二月二十七日)「テレビ番組の暴力シーンが少年の残虐な犯罪につながっている。対応が必要であり、受像機に組み込んだチップで暴力シーンや性描写を自動的にカットできるAVチップ制度の導入を検討したい」

町村信孝文相(三月三日)「青少年の健全育成に悪影響を与えている有害なテレビ番組、出版物、ゲームソフトなど有害情報の実態調査などを

行う「有害情報対策に関する検討会」を設置、中央教育審議会(中教審)の答申が出される夏ころまでに結論を得たい、「憲法にかかわる重要な問題だが、だからといって何もしないわけにはいかない」

政府は三月六日、「次代を担う青少年について考える有識者会議」を設けた。四月中旬までに意見をまとめ、関係省庁の少年犯罪対策に反映させる狙いだが、検討テーマの一つが「テレビ、出版などマスメディアの在り方」。

そして三月十日、中教審の「幼児期からの心の教育の在り方に関する小委員会」は全委員一致で「Vチップ導入」について火の手を上げた。三月末公表予定の「中間まとめ」に「Vチップの導入を積極的に検討するよう関係機関に求める」という文言を盛り込むことを決めたのである。

米、連邦通信委が導入決定

折も折、符節を合わせたように三月十二日、アメリカFCC(連邦通信委)が「Vチップ導入・テレビへの内蔵義務づけ」の大号令を発した。そして併せてテレビ各社が自主的に作った番組内容ガイド「親のためのテレビ・ガイドライン」を、Vチップを動作させる基準として正式に認可したのである。

「内蔵が義務づけられるのは、新たに生産される十三インチ以上の画面を持つテレビと、テレビ放送を受信できるコンピューター」

「メーカーは来年七月までに半分、二〇〇〇年

一月までにはこれらのすべてにVチップを組み込むことを命じる」という決定。

そしてガイドラインは「暴力シーン」「性描写」「乱暴な言葉」などを基準に、「すべての子供向き」「十四歳以下不適当」「十七歳以下不適当」といった六段階に番組を格付けし、Vチップが感知できる特殊な「格付け信号」を流す。これによってVチップが作動して受信不能にするという仕組み。親が特別な番組を見るときには解除できる。また格付けは画面にも表示される。

二年前の一九九六年、通信法の抜本改正でこの制度は法定化された。人びとのテレビ不信に乘じ、批判の中心勢力の票をとり込むための大統領選挙戦術の一つだった。まんまと奏功した。議事では与野党一致してこれを推しており、クリントン大統領は「子供たちを守るために親がリモコンを取り戻す」と胸を張った。

手順どおりなら今年後半から実現する運びだったが、テレビ界、映画界、リベラル派市民団体を中心とする「表現の自由を侵す」という反発が大きく、導入が延引した。業を煮やして提唱者のゴア副大統領が法律と議会の要請をタテに強引に実現させたといういきさつ。同副大統領は「新聞の番組欄やテレビガイド誌も格付けの表示を」と呼びかけている。

「禁酒法みたいなもの」と冷やかな向きもあるのだが、実現は、世論の保守化を背景に教育や医療など「国民の日常生活を最重視する」看板を

掲げる「クリントン政権ならではの」政策としてよいか。そのためにはテレビや新聞の編集権など二の次と見ているふしもうかがえなくはない。

Vチップそのものの単価は五〜二十ドルだそう。組み込みのテレビは五十〜六十ドルのコストアップになるといふ。また、今週から発売されるデジタルテレビには一足早く搭載される。

米国で政府がふりかざしたこの大ダンピラがわが国にどう波紋を描くか。上記したように少年の凶悪犯罪急増が一気に目立つ現状で、政府サイドはこのVチップを万能薬、即効薬であるかのよう

に喧伝し始めている。新聞の見出しをいくつか拾う。「暴力・セックス テレビから排除 Vチップの導入 米FCCが決定」(三・一三日経夕刊)、「米でVチップ導入決定 TV番組規制徹底へ 否定的な日本放送界も対応迫られる」(三・一四東京)——など。

しかし、だからといって、軽々にこれがわが国に流入するとは思えない。文部省が主役となり郵政省が助勢に回っていくら声を大にしてみて、番組が局の自主判断、自主規制にすべて委ねられ運用されるという鉄則が揺らいではならないからである。たとえ、民放テレビ現在の番組状況が非難に値するもの、と思われてもである。NHK海老沢勝二会長は即刻「反対」のコメントを出しているが、民放界の反論も早く聞きたい。

(大森幸男「放送評論家」)

# 最後は基督教超越の境地に 追想・狐狸庵センセイ遠藤周作

藤田昌司

(文芸評論家)

遠藤周作さんが逝って、早くも一年有半が過ぎる。だが遠藤さんの本は相変わらず書店の人気のであり、新刊書も相次いで刊行されている。昨秋東京会館で行われた一周忌には千百人もが参加し、にぎやか好きだった氏を談笑裏にしのんだ。狐狸庵センセイ遠藤周作の人氣は、当分衰えそうもない。

## アソビの天才

遠藤さんはアソビの天才だった。そしていくつかのアソビ仲間をつくった。その一つに「宇宙棋院」がある。へボ碁の会である。

十数年前、ある文壇のパーティーで声をかけられた。

「キミ、碁をやる?」

「いや、まったく……」

「じゃちやうどいい。わしといっしょに勉強せんか。老いては碁にしたまえ」というやないか

「はあ?」

その日、誘われたのは黒井千次、河野多恵子らの作家や編集者、文芸記者など十数人。「日本棋院」の向こうを張って、「世界棋院」という名にしようということになった。が、間もなく

「あかんあかん。世界には碁打ちがゴマンといえるんやて、そのうち「世界棋院」というのは必ずできるで。だからわれわれは「宇宙棋院」という名にしようやないか」

かくて、生まれてこの方、一度も石を握ったことがないという男女ばかり集まって、宇宙棋院が発足、毎週日本棋院でプロの先生の指導を受けることになる。もっとも遠藤さんはかつて、吉行淳之介さんと少々、習ったことがあるらしく、われわれよりはほんの少し、上手だった。

発足すると、もう少し会員を増やそうということになった。遠藤さんが新聞のエッセー欄にそのことを書くと、男女の申し込みが殺到した。男は文芸関係者に限るが、女性は資格を問わない。いきおい、容姿端麗なギャルが集まることになる。資格は問わないと書いたが、唯一の条件は、遠藤さんよりヘタなことである。

入門した会員には、初段を允許した。ちなみにいえば、わたしは目下「宇宙棋院四段」である。遠藤さんは亡くなる時、七段だったが、天国に逝かれた後、十九段を追贈された。十九段という段位は日本中、遠藤さん以外だれも持っていない。

宇宙棋院は今も続いている。会長は作家の黒井千次さん。「小説はうまいけど、碁のほうはさっぱり上達せんなア」と狐狸庵センセイをして嘆かした。こ仁だが、六段だ。

遠藤さんがつくったもう一つのアソビの会に、「劇団樹座」がある。日本最大のアマチュア劇団である。発足は「宇宙棋院」より早く、一九六八年(昭和四十三年)、紀伊国屋ホールで第一回公演を行った。もちろん座長は遠藤さんご自身。このときの公演は「ロミオとジュリエット」で、遠藤さんの派手なフエンシングが観客の爆笑を誘ったというが、わたしは見えていない。

この劇団もドシロウトばかりで、しかもいつもダブルキャストならぬトリプルキャストが、舞台の上で堂々とタッチして入れ替わるという珍プレーで笑わせたが、しかし演出、音響、装置には「劇団四季」が協力したり、音楽監督に黛敏郎を迎えたり、振り付けをジャズダンスの名倉加代子に依頼したこともあった。松坂慶子、林真理子らが演出したこともある。

わたしの友人の金田浩一(元夕刊フジ文化部長)などは、「風と共に去りぬ」公演のとき、誘われて出演、「馬の足」の役をやらされた。

「キミの上に、スカーレット・オハラ役の若い美女が乗るんやでえ。めったにないチャンスや」と甘言で誘われて、その気になって「馬の前足」になったが、美女は乗らずに、ただムチでたかればなしだったという。ともあれこの劇団

は、帝国劇場や国立劇場というひのき舞台で公演しただけでなく、ニューヨークやロンドンにまで出かけて行って公演した。「ニューヨーク」に「……彼らの演技のもつ誠実味が、舞台を圧倒していた」と評されたほどだ。

#### ユーモアの本質

遠藤さんは若い読者に圧倒的な人気があった。それは狐狸庵の名で書いた「ぐうたらエッセー」のせいである。ブームが起きたのは、一九七三年（昭和四十八年）ころからである。「ぐうたら人間学」が三十万部、「ぐうたら生活入門」も三十万部、「ぐうたら交友録」が二十万部とベストセラーになり、一日七、八千部も売れた。

「ぐうたら」ということになったのか、わからんのか。一つは安い、ということかな。『ぐうたら生活入門』なんか四、五年前に単行本で出したときは一万部ほどしか売れなかった。文庫に入れた途端に三十万部や。「つまり中学生、高校生が読んでいるということやな」

中、高生に共感をもたれたのは、自慢話が一つもなく、失敗談ばかりだからだろう。小学校時代の通信簿はアヒル(乙)ばかりだったとか、灘中(現・灘高)では一番成績の悪いクラスに入れられたりなど。傑作なのは秀才の誉まれ高かった兄(故人)との話だ。この秀才の兄にはオネシヨの癖があった。並んで寝ていたある夜、兄はガバツと起きて、「しもたッ」と泣き顔でつぶやいた。その時、この不肖の弟は、「兄が小なら、こつち

は大をやってやれ」と、決行したのだそつだ。

「ウンでしよう、そんなこと」

と私が聞くと、遠藤さんは答えた。

「キミなア、僕がいくら小説家やからといってああいうことは、想像で書けるもんやないで」

真偽はともあれ、こつちのエッセーが、受験戦争で追い詰められている中、高校生たちのカタルシスとなったことは疑いない。「違いがわかる男の……」というTVのコマーシャルに出ていたこともあって、ファンレターが殺到していた。

「見てくれや、こんなに來てるんやで」

重ねられたファンレターは一メートル以上もあつた。何気なくその一枚を見ると、丸文字で

「……もうホントにハンサムボーイと、CMがうつるたびに、キヤ、ヘボ作ウ、狐狸庵ちゃーんとわめいている私でございませう。豚のようにかわいい目、世の中に大きく向けられた鼻、いやらしい口、両ぎわにはげ上がったおでこ——もうすべて素敵とあつて、差し出し人は「狐狸庵センセイをハゲ増す会」。

ある団地のおばさんからの手紙もあつた。私息子が勉強がでなくて、悩んでおりました。先生の二本を読んで、息子の方が先生よりはましだと、安心いたしました。ぐうたらエッセーと一脈通じるものがあるのがユーモア小説である。遠藤さんというと『海と毒薬』『沈黙』や『深い河』などの純文学作品が論じられるが、ユーモア小説も遠藤文学においては

重要な地位を占めている。『おバカさん』『ヘチマくん』『どっこいしょ』『浮世風呂』『快男児・怪男児』などは傑作だ。

「僕の内面では、ユーモア小説と純文学は一つなんです。理想的なものに向かつて組み立てるとユーモア小説になり、悲しさの方に向かつて純文学になるんや」

わたしの質問にこつち答えたことがある。

「それとも一つ。エンターテインメント小説は、読まなければならないりませんや。だけど僕は、セックスを書くのは嫌いなので、だからユーモア小説になる」

とも言った。ともあれ、ユーモア小説の主人公は『おバカさん』のガストンにしても、『ヘチマくん』のヘチマにしても、みな弱虫である。

「弱虫というのはもともと僕にとって愛着のある、好きなタイプの人間なんです」

こつちした弱者が作者自身の投影であり、『沈黙』のキチジローなどにも通じていることはいうまでもあるまい。

遠藤文学には『反逆』『決戦の時』『男の一生』『信長三部作』はじめ、多くの歴史小説があり、サラリーマン層に親しまれた。遠藤さんが歴史小説に手を染めるきっかけとなったのは、『黒ン坊』という作品である。表題に問題はあるが、これは信長の覇権から秀吉の天下統一までを背景に、宣教師に連れられて来日した黒人の織りなす破天荒でユーモラスな物語で、主人公の黒人ツン

「僕は、『おバカさん』のガストンの系譜の、弱虫のよさを体現している。遠藤さんがこの小説を書いたのは、慶応の先輩シバレン(柴田鍊三郎)に、『時代小説ってのは、便利だから書けよ』とすすめられたからだ。」

「だって、吉川英治さんとか、シバレンさんとか耕し尽くしちゃったじゃないっすか」

「いや、一つだけ残っている分野がある。ユーモア時代小説だ」

というわけだが、遠藤さんはこの後、シリアスな歴史小説に向かった。

“くつたら”は仮面

遠藤さんの代表作は、いうまでもなく『沈黙』である。『白い人』『海と毒薬』などで追求してきたキリスト教信仰における西洋人と日本人の精神的風土の違いは、この作品で“日本のキリスト教の発見”ということによって解決される。作者は踏み絵のキリスト像の中にマリアの母性を発見し、踏み絵を許すのだ。そのころ遠藤さんはわたしに次のように語っている。

「僕は最近、仏像を勉強しているんです。日本にある仏像でいちばん多いのは、薬師如来と阿彌陀如来なんです。薬師如来は病気を治してくれる現世利益の仏さまであり、阿彌陀如来は極楽往生の利益を授けてくださる仏さまです。」

日本の仏像は、こちらに手を差し伸べておられるのが多いんですが、不思議なことにマリアさままで、“マリア観音”といって、母のふんいきに

しているのが多いんですね」

遠藤さんはこの後、七年の歳月をかけて『死海のほとり』を書いた。ここに描かれたのは、何もできなかった無力なイエスである。死海のほとりはローマ軍の圧制下、ライ患者や熱病患者があふれ、過激なゼロテ党によって物騒然となっていた。人々はメシヤ(救い主)を待ち望んでいた。

しかしイエスは、病気を治すことも死者を生き返らすこともできない。人びとの期待する奇跡など何一つ行えなかった。ただひたすら人を愛し、ラ

イ患者がいればそのウミをふいてやり、死に行く者がいればその手を握ってやり、あわれな娼婦がいれば共に泣いた。だがこつした無力なイエスの

もとからは、弟子たちが次つぎと去っていった。裏切られ孤独になったイエスは、ユダヤ教の神殿と律法を犯したとして処刑されるのである。

キリストの復活とは、イエスが弱い人間の同伴者として永遠に生き続けることだ——というのが、遠藤さんの到達した解釈だった。氏はこの後

さらに、表裏一体の『イエスの生涯』を書いた。「思いつきで書いたんじゃない。聖書を詳しく勉強したし、現地でも調べて、その裏付けをもつて書いたんだ。僕の聖書読みは普通の読み方と違っているが、申し開きできる自信はある」と氏は当時、語っている。

遠藤さんが最後に到達したのは、『深い河』だった。この小説は、妻をガンで亡くした初老の男を中心に、数人の男女が、インドのガンジス河の

ほとりに旅行するという設定で展開される。男の

妻は死に臨んで、必ずこの世に生まれ代わってくるから探してほしいと哀願したが、その生まれ代わりがインドにいるという霊媒者の告知に従って旅に立つのだ。一行はほかに、この妻の末期をみつめたボランティアの女性、ビルマ戦線で人肉を食う極限状況を体験した元兵士、ひん死の結核にかかり、九官鳥が身代わりになったため助かった童話作家、新婚早々のカメラマンなどだ。

この作品で遠藤さんは、一個のキリスト者という境界を超えた。一読してだれもが、作者はモはや、キリスト教を超越したのではないかと思っただけに違いない。

没後に発見された『深い河』創作日記』を読んだ、そのなぞが解けた。この日記の中で氏は、偶然入手したヒックの『宗教多元主義』という本が衝撃的な啓示となったことを明らかにし、「これは偶然というよりも私の意識下を探り求めたものが、その本を呼んだというべきであろう」とまで述べている。ヒックはキリスト教神学者でありながら、「本当の宗教の多元主義はイエスをキリストとする神学をやめ」るべきだと言っているのだそうだ。

それにしても驚いたのは、氏の勉強ぶりだ。腹部の激痛をこらえながら、ヒックを学び、G・グリンやモウリヤックを読んでいる。“くつたら”などでは決してなかったのである。

(元時事通信社文化部長)



## 増えるロシア紙の外国印刷

政府に課税の動き、波乱か

最近、ロシアの新聞、雑誌がフィンランド、ポ  
ーランドなど近隣ヨーロッパ諸国で印刷され、そ  
の印刷代金の総額が年間、二億五千万ドルを超え  
た。昨年、このことが明らかになるや、ロシア政  
府は新聞・出版に対する課税と関税免除の特典廃  
止に踏み出す意向を示し、今年は新聞・出版界と  
政府間の新しい紛争のタネになるうとしている。  
税務当局の計算によると、外国印刷による新聞、  
雑誌に対する関税免除による税収の損失は二億ル  
ーブルという見逃せない額に達したという。

しかし、新聞・出版側の言い分によると、そも  
そも、一九九五年五月に公布された法律「マスマ  
ディアと出版に対するロシア連邦政府の支援」に  
基づく外国印刷に対するロシアでの課税免除は、  
相手国との合意に基づき、二重課税を防止する措  
置であり、関税免除はロシアの印刷所の施設が老  
朽化している事情なども考慮した結果だった。一  
九九五年以降二年間は選挙の年であり、政界にも  
マスコミの歡心を得たいという思惑があったにせ  
よ、国際基準に合った正当な措置だった。

新聞・出版に対する特典廃止の動きは一九九七  
年五月から始まったが、この背景には顧客を西欧

## 海外情報

諸国に奪われかねないロシア国内の印刷業者と少  
しでも税収を上げたい税務当局者との”談合”が  
あったと「セポードニヤ」紙(一九九八年三月の  
第四号)が報じている。「どこの国の政府でも自  
国の産業を保護したいと考えるのは当然だが、印  
刷業者もまた関税免除の恩典に浴した」という。

同紙によると、一九九五年法律には、外国で印  
刷された新聞だけでなく、印刷業者が輸入する印  
刷機械に対しても関税を免除することになってい  
た。西欧の機械製造業者はアート紙を使ってポ  
ルノグラフィ誌を作成する印刷機械をロシアに売  
り込んだ。今や、ロシアには西欧各国の一倍半に  
及ぶポルノ誌が氾濫している。これは明らかに一  
九九五年法律作成者の落ち度である。同法を改正  
するなら、関税免除の項に「印刷機械を除く」と  
いう但し書きを加えるべきだった。

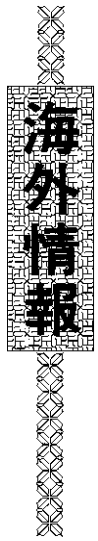
さらに「セポードニヤ」紙は「ソビエト時代の  
六十年間、禁止されていたポルノへの国民の関心  
が急増したことはやむを得ないが、印刷業者は本  
当は輪転機を輸入するべきだった」ともいう。こ  
ういう論調を見ると、この問題は新聞・出版と政  
府の対立というよりも、むしろ、新聞・出版と印  
刷業者との対立といったほうがよいかもしいな  
い。紙代や印刷代の高値はかねてより新聞・出版  
側の恨みの的だった。ロシア政府は手をこまねい  
ていたわけではない。産業一般の法人税は五〇%  
と新市場経済国としては異常な高さだが、印刷業  
に対しては二〇%に軽減していた。

もう一つ、注意しなければならないのは、この  
問題が旧ソビエト時代の産業が東欧諸国を含めた  
COMECON体制であったことの後遺症であるとい  
点である。かつての計画思想に基づく国際分業の  
もとで印刷業、とくに絵画、写真集などの芸術作  
品はロシアではなくポーランドや東ドイツで作ら  
れ、それが計画的、効率的だと考えられていた。  
つまり、もともと輸入だったのである。したがっ  
て、ソビエト時代のロシアでは芸術は保護され  
たが、印刷文化は育たず、ソビエト体制崩壊後は、  
新聞でさえ近隣外国への発注となり、芸術作品集  
はポルノ誌への変質を遂げたと見てよい。

日本はむしろ、社会主義国でも計画経済でもな  
いが、ロシアの印刷文化の衰退を他山の石とすべ  
きところもあるのではないか。テレビの視聴率、  
新聞の発行部数、それに本については販売取次会  
社のコンピューターの端末が大手出版社にまで及  
び、著者と題名を打ち込んだだけでただちに採否  
や印刷部数が決められるシステムなどを見ると不  
安を覚えないではいられない。

ところで、ロシアにおける今度の新聞・出版に  
対する課税・関税見直し問題は議会に持ち込まれ、  
来年一月まで続く現在の会期の主要議題となっ  
た。一九九五年法律制定以来、通算四度目の見直  
しだが、主要議題になったということは、今度は  
政党各派がいかにマスコミを利用するかで争う本  
格的な出番が来たということでもある。

(高橋 実(評論家))



### 業界裁定に反発、提訴へ

オーストリア最大日刊紙

オーストリアで、プレスの自主規制機関「オーストリア・プレス評議会」が下した裁定を不満とした新聞が、評議会を訴えるという事件が起こっている。この事件はオーストリアのプレス評議会

の歴史のなかでも初めてのことである。  
事件の主は、タブロイドより小型の紙型をもつ街頭売り新聞で、オーストリアで人口の四二%の人々が手にし、日曜には十四歳以上の人々の五〇%が読んでいるという最大の日刊紙『ノイエ・クロネン・ツァイトウング』(以下、クロローネ)である。同紙は、株の四五%をドイツの有力紙WAZ(ヴェストドイッチェ・アルゲマイネ・ツァイトウング)によって所有されている。

クロローネは一九九七年十月八日発行の第一面に、手紙爆弾事件の犯人とされる人物の顔写真を紙面いっぱい、「告白したも同然の顔」と書いた大見出しとともに掲載した。プレス評議会はこれを無罪推定の原則に対する許されない侵害と判定し、プレスの尊厳を深く傷つけたとしてけん責処分に処した。

ところがクロローネは、これによって信用を損なわれ、他のプレスとの競争において損害を受けた

として、約三千五百万円の損害賠償を要求して逆に評議会を裁判に訴えた。そのついでに評議会の一人ひとりのメンバーに対し、評議会の決定への関与について回答するよう要求した。要求書は丁寧な言葉ながら、「評議会の決定に対する訴えに、あなたを巻き込まなければならぬ事態を避けたために、当該の決定に賛成、反対のどちらの票を投じたのかをお知らせくださるよう、お願いをいたします。もし期限までに回答がない場合は、残念ながら、法に訴えてあなたの関与を明らかにしなければなりません」と述べている。

評議会の内部組織で、十二人で構成する苦情処理委員会のフーベルト・ファイヒトルパウアー委員長は、損害賠償額を「とんでもない要求」と評し、「訴訟は法的になんの根拠もない。そうでなければ、評議会のすべての決定は新聞社への信用棄損ということになってしまふ」と批判する。

一方クロローネの代理人、エルンスト・スヴォオボダは、苦情委員会は「許されない方法でわれわれと他の印刷メディアとの間の競争に介入した」と反論する。

クロローネは「恥ずべき判決」と題する記事で、評議会の決定の前に何も意見を聞かれなかったと主張したが、評議会の総会に代理人を送る機会があったのに、それを利用することもなかった。

これと類似した事例がドイツにある。それはグラーフ雑誌「シュテルン」に掲載されたイランの元皇帝一家についての記事に関するもので、同誌は

ドイツ・プレス評議会がこの記事を問題にするのを妨害するため、評議会を裁判に訴えた。評議会が新聞に営業妨害的な判断を下し、新聞の名前を公表するのは、「憲法の規定(検閲の禁止)に違反する」というのが、その主張であった。

評議会はこの訴えに対して、当該の記事は「悪趣味であり、相手の尊厳を傷つける」ものと反論し、裁判所も「プレスに対する評議会の否定的な裁定は、国家による検閲のような強制力をもった手段ではない」とし、「評議会が読者からの苦情に対して評決を下すことを全般的に禁ずるようなことはまずできない」と述べて、評議会の判定の合法性を認めた。

オーストリア・ジャーナリスト組合から選出されている評議会のメンバー、アレクサンドル・バラシツは、クロローネの訴えを「法的に正しい判断が下されるならば悪くない」と判断する。バラシツはこの事件を、「もはや問題を机の下に隠すようなことをしない」ようにするチャンスであるとみる。「オーストリアではクロローネが政治を左右し、意見へのテロと操作が支配している」というのが、彼の判断である。

ヨーロッパ・ジャーナリスト同盟も評議会を応援している。連盟は「一新聞がプレスの自主規制機関に脅しをかけようなどということは、全く認めることができない」と批判する。事態はどのように展開するのか。その影響には大きなものがあると思われる。

( 広瀬英彦 〓 東洋大学教授 )

### 発展には流通改革が力ギ

#### 中国新聞出版業の将来計画

中国・新聞出版業は、このほど、近未来の新聞産業、出版産業のあり方を構想した「新聞出版業二〇〇〇年および二〇一〇年発展計画」を策定した。新聞出版報二月二十七日付に掲載された同計画の概要を紹介する。

同概要によると、この計画では、まず二〇〇〇年までに、「野放図な発行状態を治め」（治理治濫）たうえで、出版管理体制の改革を進める。その結果として、二〇〇〇年には、新聞や各種刊行物のため一年間に使われる、一人当たり用紙量は、第八期五力年計画最終年である一九九五年末の五〇％増、A Vソフトおよび電子出版物の量は二倍となる。

二〇一〇年における新聞出版業の目標は、まず一人当たり用紙消費量が二〇〇〇年時の二倍、A Vソフトおよび電子出版物の量も二〇〇〇年時の二倍となる。（注）新聞の場合、一人当たり用紙消費量データは手元にないが、一九九五年一年間の用紙消費総量は約八十三万トンだった）

計画では、新聞、出版各業のさらなる発展のために、経営の集約化を重視。新聞、出版、発行、印刷のグループ経営、それも、地区、業態、所有

制、または国境を超えた多国籍グループも生まれ、としている。

具体的には、二〇一〇年までに、売上高数十億元から百億元以上の出版集団を全国で五ないし十、売上高十億元規模の出版社を二十ないし三十作る。新聞では、現在は広州日報グループただ一つの新聞グループを、二〇〇〇年までに五ないし十作る。二〇一〇年までに、この新聞グループをさらに発展させるとともに、売上高一億元以上の新聞社を全新聞社の一〇％にまで拡大する。

雑誌など定期刊行物では、一回の発行量が百万部を超えるものの出版点数を、二〇〇〇年までに、全定期刊行物点数の〇・二％にまで伸ばし、さらに二〇一〇年までに〇・四％にまで拡大する。

また、五十万部を超えるものの出版点数を、二〇〇〇年までに〇・六％にまで伸ばし、さらに二〇一〇年までに〇・七％にまで拡大する。CDROMなどのニューメディアは後発のメリットをいかして、新しい出版媒体としての発展を図る。

また、特定ジャンルに焦点を当てた重点出版計画に力を注ぐ。

重点出版計画とは、たとえば、第九次五力年計画において、中央と地方がそれぞれ策定した重点出版計画（一二〇〇工程）、児童向け動画のための五一五五工程、国務院が批准した「一九八八年（二〇〇〇年）全国辞書編纂出版計画」、すでに展開されている社会科学図書のための「百刊工程、社刊工程」、A Vや電子出版物のための「第九次

五力年計画重点出版物計画」などを指す。

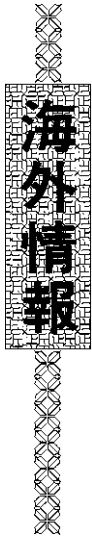
流通に関しては、「流通を活性化することこそ、新聞および出版業発展の力ギであり、流通改革をスピードアップしなければならぬ」と述べるとともに、とりわけ図書出版に関しては、全国的に統一された、開放的、競争的で、かつ秩序も保った大マーケットを作ること発展目標と位置付けた。教材図書の発行体制と一般図書の発行体制を何らかの方法によって分けるアイデアも示した。

また、二〇一〇年までに、全国で五ないし十の発行グループおよび大型物流センターを設立する考えを示した。

制作および印刷に関しては、第九次五力年計画の終了後二〇一〇年までは、新聞および各種出版物の電子編集化、オフセット化は年率一〇％のスピードで成長を続ける、という。

ここに掲げられた未来像は、全般的な経済成長の持続を前提としており、しかも数量的な拡大見通しを示しているだけのものである。しかし、一人当たり用紙消費量が数年内に倍増する見通しにしても、今の成長ぶりから考えて無謀なことではなく、改めて中国の新聞、出版分野の発展可能性に気付かされる。また、新聞にせよ、書籍・雑誌にせよ、これ以上の消費量拡大のためにはどうしても「流通」がボトルネックであるとしている点は注目される。

（木原正博「新聞協会編集部」）



# 俳句

第三十一回時事句一句会(その二)

平成十年二月十日 新橋「味しま」

兼題『野』(得点順)

悪文を書き終へて野に遊びけり  
 藁を着し野佛のさま寒牡丹  
 枯野原どつち行くのと犬に聞く  
 野に晒す覚悟はままよと花と龍  
 春の野や羽虫の恋の末哀し  
 荒野ありて夜半に風の吹きすさぶ  
 武蔵野の木々皆高し日脚伸ぶ  
 野に立ちし面影追ふや春の雪  
 野を翔ける鉄人のスキー迷いなし

あまり 磯 那由太 森田 久美子 藤原 魚酔 春楊 美佐子

虎ノ門句会

平成十年二月二十七日 同盟クラブ

白椿かなしきはなしさりげなく  
 恋猫のうだつあがらぬ人と住み  
 草餅のかをり残れるのど佛  
 生きものの目覚め促す春の雪  
 散りぎはも見頃もありて梅野点  
 梅薫る八十路の晨窓の辺に  
 ひよつとして豆を撒かれてる節分  
 小春日や何を聴いても馬耳東風  
 ふらここや老女の里唄きりもなや  
 真夜廚泣いて舌出す寒しじみ

清好 " 義明 " 易信 " まさお " 六郎 " "

## 調査会だより

紅白の盆梅ひらく辻が花 博一  
いまは亡き人思ひ出す葎草 "

新聞通信調査会は三月二十七日(金)

午後一時半から同盟クラブで、八牧浩行氏(時事通信社経済二部長)を講師に招き「経済・金融危機からの脱出は可能か」と題する講演会を開いた。

【新住所】

六五九一 芦屋市緑町四番六一  
〇〇四二 七九七―三―三七 三三三

【悲報】

【悲報】 中新 凡夫氏(元時事通信社大津支局長)肺炎のため二月二十一日死去。八十九歳。喪主は長女堀江右子さん。自宅は京都市西京区嵐山朝月町三一―三。

山田 幸吉氏(元時事通信社農林経済版主任)

肺炎のため三月三日死去。七十八歳。喪主は妻友子さん。自宅は藤沢市鶴沼東二―一―二。

田中 功氏(元共同通信社編集局次長、同福岡支社長)敗血症のため三月十日死去。八十五歳。喪主は長男紀志夫氏。自宅は東京都豊島区上池袋四―五―九。

西沢 寿一郎氏(元共同通信社国際局次長、同神戸支局長)事故のため三月十一日死去。七十三歳。喪主は妻久江さん。自宅は東京都世田谷区南烏山三―一―一九―四 四。

### 訂正

正。

前月号一―ページ中段末尾から六行目の「情報減」を「情報源」と訂正。

### 目次(四月号)

神々に祈る独特の歴史感覚…………… 1  
 田所 泉

好況支える堅実な市民…………… 4  
 鈴木 邦彦

追想・狐狸庵センセイ遠藤周作…………… 14  
 藤田 昌司

【メディア談話室】  
 ノンフィクションに学ぶ…………… 権田 萬治…………… 8  
 【プレスウオッチング】  
 匿名報道、その矛盾と問題…………… 前沢 猛…………… 10  
 【放送時評】  
 五輪結果に満足のTV界…………… 大森 幸男…………… 12

【海外情報】  
 ダウ・ジョーンズ社赤字に…………… 佐々木謙一…………… 7  
 増えるロシア紙の外国印刷…………… 高橋 実…………… 17  
 業界裁定に反発 提訴へ…………… 広瀬 英彦…………… 18  
 発展には流通改革がカギ…………… 木原 正博…………… 19

定価一五〇円 一年分一五〇〇円(送料とも)  
 発行所 財団法人 新聞通信調査会  
 〒一〇〇一 東京都港区虎ノ門一―五―一六  
 (晩翠ビル四階)

印刷所 株式会社 太平印刷社  
 振替口座 一一一―四―七三三六七番  
 (三)三五九三―一八(代)  
 ©新聞通信調査会1998